

〈講演記録〉

いま親としていちばん必要なこと（前編）

——「わからせる」より「わかる」こと——

春 日 耕 夫

（受付 2000年5月9日）

「いま親としていちばん必要なこと」というテーマで話をさせていただきます。

ご承知のように、「いま」という時代は、子育てや親子関係のあり方が非常に難しくなった時代だと言って差し支えないと私は思います。もちろん、子育てや親子関係が難しいのは決していまに始まったことではなく、過去の時代においてもいまと同じように、あるいはいま以上に、子育ては大変な仕事だったんだろうとは思いますが、しかし、それでもなお、「いま」という時代は、これまでの時代とはまったく違った意味で、子育てや親子関係のあり方が非常に難しくなった時代だと言っても差し支えないと私は思うんです。

かつて、私たちが子どもだったころ、日本は全国、すみからすみまで、非常に貧しい国でした。しかも、貧乏人の子沢山と言いまして、たいていの親は貧乏なうえに、たくさんの子どもを抱えて、子育てには大変な苦勞をしなければならなかったわけですね。文字どおり、自分が食べたいのは我慢して子どもに食べさせるというふうにしなければ子どもを育てていくことができなかった時代、言ってみれば、自分の生命を削っていくという形でしか子どもを育てることができなかった時代、そんな時代が、この日本でも、つい最近まであったわけなんですね。そんな時代の親たちにとって、子育てというのは、本当に大変な仕事だったんだろうと思うんです。

ところが、いまは大変豊かな時代になりまして、その点では子育ても非

常に楽になってきた。少なくとも、どうやって子どもたちを食べさせていくかということで頭を悩まさなければならぬような状況は、ほとんどと言ってよいくらいなくなってきた。そういった意味では子育ては確かに楽になってきたと言ってもいいだろうとは思いますが、しかし、それならば、子育てそのものが楽になってきたのかと言いますと、必ずしもそうではないと思うんですね。むしろ、ある意味では、子育ては、かつてとは比べものにならないくらい難しくなってきた。そう言っても構わないと私は思うんです。

いま、子どもたちのまわりには、以前にはなかったような深刻な問題が、さまざまな形で現れています。たとえば、登校拒否は依然として増えつつあると言われていたり、高校中退も増えています。いじめ問題も相変わらず続いていますし、ほとんどの子どもや若者が多かれ少なかれ対人関係上の問題で悩んでいると言われていたり。それから、もっと病的な、とでも言いましょか、「心の病気」とも言うべき問題で悩んでいる子どもや若者も非常に増えてきていると言われていたり。

たとえば、「自己臭症」という病気が最近非常に増えてきていると言われていたり。これはどんな病気かと言いますと、自分はいやな臭いを発しているに違いないと思ひ込んでしまったり、そのために自分はまわりからいやがられているに違いないと思ひ込んでしまったり、そのことで非常に悩んだり、対人関係場面に出ていくことができなくなったりするという、そういう病気なんだそうですけれども、そういう病気で悩む子どもや若者が非常に増えてきていると言われていたり。

それから、「醜形恐怖」とか「醜貌恐怖」と呼ばれる病気も最近非常に増えてきていると言われていたり。これはどんな病気かと言いますと、自分は非常に醜いと思ひ込んでしまったり、こんな自分ではとても生きていけない、人前に出ていくことなんかできっこないと思ひ込んでしまったり、その結果対人関係場面に出ていけなくなったり、整形手術に執拗にこだわったりするという、そういう病気なんだそうですけれども、そういう病気で

悩む子どもや若者も非常に増えてきていると言われていました。

そのほか、拒食症とか過食症、あるいは「家庭内暴力」とかいわゆる「ひきこもり」といった問題など、子どもや若者たちの世界には、貧しかったかつての時代の日本ではほとんどみられなかったような深刻な問題が、いろんな形で現れています。そういった状況からもうかがえますように、「いま」という時代は、子どもたちにとって、非常に生きづらい時代になってしまったと言っても差し支えないと私は思うんです。まさしくそういった時代のなかで、いま「親」という立場にある人たちは子育てをしていかなければならなくなってしまったわけなんですね。そういった意味では、「いま」という時代は、子育てや親子関係のあり方という点から言っても、本当に難しい時代になってしまったと言って構わないと私は思うんです。

そうしますと、そういった難しい時代のなかで子育てをしていこうとする場合、いま親としていちばん必要なことは何なのかということがあらためて問題になってくるわけなんです。その点について私の考えを予め結論的に言っておきますと、子どもに「わからせよう」とするのではなく、子どものことを「わかろう」としてみるからこそ、いま親としてはいちばん必要なことではないだろうかということ、これが今日ここで私が言いたいと思っていることでもあります。

もちろん、そう簡単に言い切ってしまうのは単純化のしすぎじゃないかと言われれば、確かにその通りだろうとは思っています。なにしろ、この日本には、いままさに子育て真っ最中という家族が何千万もありまして、そのなかにはいろんな家族があり、いろんな親がいて、いろんな子どもがいるわけですから、いま親としていちばん必要なことは何なのか、なんて問題に一概に答えられるはずなどあるわけがないと言われればまったくその通りなんです。それでもなお、ごく一般的なところで言いますと、「いま」という、この難しい時代のなかで豊かな親子関係を作っていこうとする場合、何より必要なことは、先ほども言いましたように、子どもに「わからせよう」とするのではなく、子どものことを「わかろう」としてみる

ことだと言ってもいいのではないか。そう私は思うんですね。なぜなら、親が子どもに「わからせよう」とすればするほど、親子関係は、たいていの場合、壊れていってしまうから、なんですね。

それでは、いったいなぜ、親が子どもに「わからせよう」とすればするほど親子関係は壊れていってしまうのか、という問題なんです。その問題につきましても、親が子どもに「わからせよう」とするのはどんなときかと考えてみれば、答は自ずと明らかになってくると思うんですね。そこで、親が子どもに「わからせよう」とするのはいったいどんなときかという問題なんです。それはもう、言うまでもなく明らかなことでありまして、親が子どもに「わからせよう」とするのは、「子どもの考えは間違っている」とか「子どもは何にもわかっていない」と親が考えているときであるはず、なんですよ。だって、「子どもはよくわかっている」とか「子どもの考えは間違っていない」と親が考えているのだったら、何もわざわざ子どもに「わからせよう」なんてしなくてもいいわけですからね。「そうそう、そのとおり!」「お前の言うとおりに!」なんて調子で言っておけばいいわけですからね。それに対して、「子どもの考えは間違っている」とか「子どもは何にもわかっていない」と親が考えているとき、そういうときこそ親は子どもに「わからせなきゃ」と思うわけだし、「そうじゃないんだよ。本当はこうこうこうなんだよ」といった形で「わからせよう」とするわけなんですよ。

ということはどういうことかと言いますと、親が子どもに「わからせよう」としているとき、その親は、結局のところ、子どもとの間に、「否定の関係」を作ることになってしまうんですね。そして、「対決の構え」とでも言いましょうか、「お前はちっともわかってないじゃないか!」とか「お前の考えは全然間違っている!」といった感じで子どもとの関係を作ることになってしまうんですね。そうしますと、親が子どもに「わからせよう」とすればするほど親子関係は壊れてしまうことになりかねないというのも、むしろ、当然のことなんですよ。

ですから、子どもとの間に豊かな関係を作っていきたいと思うのだったら、何よりもまず、子どもに「わからせよう」とするのではなく、子どものことを「わかろう」としてみななければいけないと私は思っているわけなんです。ところが、これが、現実には、なかなか難しいことなんです。もう、たいていの人の子どもの顔を見た途端に「教えたく」なったり「言って聞かせたく」なってしまって、子どものことを「わかろう」とするより先に、子どもに「わからせよう」とばかりしてしまうんですね。そして、「そうじゃないでしょ、こうでしょうが!」「どうしてそんなことがわからないのよ!」「ちゃんと言うことをききなさい!」といった調子で言ってしまって、結局は「対決の関係」を作っていくと、子どもとの関係そのものを壊してってしまうんですね。

もちろん、親といっても現実にはいろんな親がいるわけですから、全部が全部そんな親ばかりというわけではないわけですね。当然、子どもには興味も関心もないという親だってあるわけですし、自分が遊ぶことしか頭にはないという親だってあるわけですね。なかには本当にひどい親もいて、炎天下の駐車場の車に子どもを閉じこめたまま、自分はパチンコに夢中になっているうちに、子どもは脱水症状を起こして死んでいた、なんていう悲惨な事件を起こす親だってあるわけですが、そんなタイプの親だったら、おそらくこの会場にはきていらっやらない。そんなタイプの親だったら、この会場にくるぐらいなら、むしろカラオケにでも行ってしまわれるはず。ところが、ここにお集まりの皆さんは、自分の楽しみなんか二の次にして、「子育て講座」を聴きたいということで、わざわざこの会場まで足を運んでこられた人たちばかり。それくらいに教育熱心で、子育て熱心な人たちがここには集まっていらっやるというわけですね。

ということはどういうことかと言いますと、ここにお集まりの皆さんは、教育熱心で子育て熱心な人たちばかりというわけですから、どちらかと言えば子どもの顔を見たらすぐ「教えたく」なったり、「わからせたく」になってしまうという、そういうタイプの人が多いんじゃないか。そして、失礼

ながら言わせていただくとするならば、そうやって親子関係を壊してしまいかねないという、そういうタイプの人が多いんじゃないか。あえて言葉を選ばずに、失礼を顧みず言わせていただくとするならば、そう言っ言えないことはないんじゃないか。そう私は思うんですよね。

だから私は言いたいんです。そんなことはもうやめましょうよ。そんなことはもうやめにして、まずは子どものことを「わかれよう」としてみましようよ。そうしたときはじめて親子がお互いに分かり合い、お互いに理解し合おうとする関係が生まれてくるわけだし、豊かな親子関係も生まれてくるんだから。だから、子どもに「わかれよう」なんてするのはやめにし、まずは子どものことを「わかれよう」としてみましようよ、ということ、これが今日ここで私が言いたいと思っていることであります。

*

そういったことを私があらためて考えるようになったひとつのきっかけなんです、いまから4～5年ほど前のことだったでしょうか、季節は11月も半ば近くで、そろそろ寒くなり始めという時期のことでしたけれども、その日、私は、車で30分ほど行ったところにある、ある温泉に行っていたんですね。入浴料が当時三百円で、とにかく安いということと、お湯の質がとてもよくて非常に気持ちがいいというわけで、私たちとしては結構お気に入りの温泉だったんですが、ただ、入浴料がわずか三百円というだけのことであって、施設は古いし、しかも貧弱。おまけに浴室が非常に狭くて、入浴客が4～5人もあったらもう窮屈。ですから、その温泉に行くときはいつも、「今日は先客がありませんように……」なんてことを考えながら行っていたものなんですが、その日は幸い先客はひとりもなくて、まるで貸し切り状態で、「極楽、極楽！」といった気分で行っていたんですね。ところが、しばらくしたら3歳ぐらいの男の子と30歳をちょっと過ぎたぐらいのお父さんらしい人が入ってきて、お湯で身体をざっと流して、お父さんがまず浴槽に入って、子どもに、「入れ」っておっしゃるんですね。そ

したら、子どもは言われるまま入ろうとして、浴槽のお湯に足を浸けようとしたんですが、その途端に「熱いよ！」と言って、パッと足を引っ込めてしまったんです。そしたら、今度は、お父さんが、「熱くないよ！」とおっしゃるんです。要するに、「熱くないから入れ！」というわけですね。だけど、その子はお父さんの言うことなんかきこうともしないで、「だって熱いんだもん！」といった調子でお父さんに言い返していくんです。

本当のことを言いますとね、たいして熱いお湯ではなかったんです。その温泉はどちらかというやや温めの温泉で、ゆっくり浸かってじっくり温まれるというタイプの温泉だったんです。ですから、本当は、たいして熱くはなかったんです。

しかし、それならば、その子が嘘をついていたのかと言いますと、決してそうではなかったと思うんですね。先ほども言いましたように、季節は11月も半ば近くで、そろそろ寒くなり始めという時期でしたから、一日中外で遊んで、肌が冷え切った状態でお風呂に入ろうとしますと、少々温めのお湯でも、熱く感じるこゝとって、あるじゃないですか。だからその子は「熱いよ！」と言ったのであって、その子は別に嘘をついていたわけではないし、間違っことを言っていたわけでもない。あくまでもその子は、その子自身にとつての眞実を語っていたという、それだけのことだったと思うんですね。

ですから、お父さんが「熱くないよ！」とおっしゃったとき、その子自身としてはあくまでも「熱い」と感じているわけですから、「だって熱いんだもん！」とその子が言い返していったのも、きわめて自然な成り行きだったと思うんです。しかし、それと同時に、お父さんはお父さんで、「たいして熱くはない」と思っていらっしやるわけですから、「だって熱いんだもん！」と子どもが言い返してきたとき、「そんなことはないよ！」「熱くはないよ！」とお父さんがおっしゃったのも、やはり自然な成り行きだったと思うんです。

というわけで、子どもが「熱いよ！」と言え、お父さんが「熱くない

よ！」とおっしゃるし、お父さんが「熱くないよ！」とおっしゃれば、「だって熱いんだもん！」と子どもが言い返していく。そういうやりとりが延々と続いていくんですね。そのやりとりのうるさいこと、うるさいこと。私は、もう、そのやりとりを見ながら、「うるさいぞ！」と叫んでしまいたくなるどころを叫ばずに、「いったいこれは何だろう?！」と、考え込んでしまったんですよね。

だって、よく見る光景でしょう。たとえば、スーパーマーケットのレジのあたりでお母さんと子どもがやり合っている。「アイスクリームが欲しいよ」と子どもが言えば、お母さんは「ダメよ！」と言い返している。それでも子どもは負けないで、「だって欲しいんだもん！」と言い張っている。しかし、お母さんも負けないで、「ダメったらダメッ！」って調子でやり合っているという、そういう光景。よく見る光景だとは思いませんか。だから私は考え込んでしまったんです。「これはいったい何だろう?！」って。そして思ったんです。この二人は、要するに、「否定の会話」をやっているわけなんだって。そして、「自己主張の会話」をやっているわけなんだって。

だって、この二人は、お互いに、「お前は間違いだ!」「いやいや、お父さんこそ間違いだ!」といった調子で言い合っていて、お互いにお互いの言い分を否定し合っているわけですから、この二人がやっているのは、まさしく、「否定の会話」そのものなんですよ。それから、この二人は、お互いに、「俺が正しいんだ!」「いやいや、僕のほうこそ正しいんだ!」と主張し合っているわけですから、この二人がやっているのは「自己主張の会話」でもあるわけですね。というわけで、この二人は、お互いにお互いの言い分を否定し、自分の正当性を主張してお互いに譲らないというわけですから、この二人の関係は、要するに、「対決の関係」とでも言いましょうか、そういう関係になってしまうんですね。ですから、私は、この二人のような関係を、《否定=対決型》親子関係という言葉で呼んでおきたいと思うんです。

で、その《否定=対決型》親子関係なんですが、これはあくまでも「対

決の関係」ですから、結局は「勝つか負けるか」の関係になってしまいますし、「力づくの」関係ということになってしまいますよね。ですから、こういう関係では、親も子も、自分の言い分を押し通していくためには、何らかの「力」を行使できなければならないということになってくるんですね。そこで、そういった「力」としてはどんなものがあるのかということが次の問題になってくるわけなんですけど、その点について言いますと、まず、親の側には、いろんな「力」がありますよね。なかでも、いちばん手っ取り早いのは叩くこと。とにかく叩く。叩くふりをするだけでも効果がある。それから、大きな声で怒鳴ること。2～3歳ぐらいの子どもだったら怒鳴っただけでも効果がある。それから、「そんなことを言うんだったらアイスクリーム買ってあげないよ」といった形で「威す」という方法もありますね。「経済制裁を加える」とでも言いましょか。それから「道徳心に訴える」というやり方もありますよね。「よい子はそんなことを言うもんじゃありませんよ」といった形で道徳心に訴えていくというやり方。それから、最後に、男がやったら様にならないけど、女性がやったら様になるという、とっておきの方法がある。とりわけ、見るからに弱々しそう、といった感じの女性がやれば効果抜群という方法がある。それは何かと申しますと、泣くこと、ですね。悲しそうに泣く。悲しみを押し殺したように泣く。そして、もう、どうにも抑えられないといった感じで、しかしそれを必死で抑えている、みたいな感じで横を向いて、「どうしてうちの子は……」とだけ言って、後はそっと涙を拭くだけ、というような感じで泣く。そうすれば、たいていの子どもは言うことをきいてくれますね。

親が泣いていると、子どもはわがママを言わなくなるものなんです。不幸に打ちのめされて悲しそうに泣いているお母さんを見たら、子どもはわがママなんか言えなくなるんです。いちばん頼りのお母さんが泣いているんです。そしたら子どもは不安で不安でしかたがなくなりますから、お母さんを一生懸命慰めようとするんです。そして、わがママなんか言わないで、親の言うことをよくきく「よい子」になってしまうんです。そういっ

た意味では、「泣く」ということも、子どもに言うことをきかせるために親が行使できる、もっとも有効な「力」のひとつなんですね。

それでは、次に、子どもにはどんな「力」があるのかと言いますと、それはもう、2～3歳の子どもだったら、たったひとつしかありませんよね。それは何かと言いますと、泣くこと、ですね。とにかく泣く。泣いて要求を通していく。そしたらお母さんが負けて買ってくれる。買ってくれるまでは泣きつづける。

昔から「泣く子と地頭には勝てぬ」という諺がありましてね。「地頭」というのは何かと言いますと、昔のお役人ですね。年貢取り立て担当のお役人。そのお役人が「今年の年貢は収穫できたお米の6割じゃ！」なんてことを言い始めたら、それがどんなに無茶な要求だったとしてもどうしようもない。言われるまま、黙って従うよりほかに方法がない。それと同じように、子どもが泣いて要求を始めたら、それがどんなに無茶な要求だったとしてもきいてやるしか方法がない、という、そういう意味の諺ですね。そういう諺にもありますように、「泣く」というのは、昔から、子どもが行使できる唯一で最大の武器だったわけですね。

ですから、スーパーマーケットなんかで「アイスクリームが欲しい」と言って子どもが泣いているとき、あれは悲しくて泣いているわけではないんです。「力」の行使をやっているだけのことなんです。だからこそ、アイスクリームが手に入った途端にケロッと泣きやんで、ニコニコ笑って、「あのね、お母さん……」なんて調子で話しかけたりするという器用なことまでできるんですね。あんなのを見ていると、私なんか、他人事とは言いながら、腹がたってきて、「いまのいままで泣いていたんだろ。そんなに簡単に泣きやむなよ！」なんて嫌味のひとつぐらい言ってやりたくもなるんですが、ところが、どっこい、あれは悲しくて泣いていたわけではないんです。あくまでもアイスクリームを手に入れるための「手段」として泣いていたにすぎないんです。だからこそ、あんな調子で、アイスクリームが手に入った途端にケロッと泣きやんで、ニコニコ笑ってお母さんに話しかけ

る、なんてこともできるんですね。

というわけで、「泣く」というのは、昔から、子どもが行使できる唯一で最大の「力」だったわけなんですけど、そういった「力」を行使して子どもは自分の言い分を押し通していかこうとするわけですね。それに対して、親は親で、親として行使できるあらゆる「力」を振りかざして子どもをねじ伏せていかこうとするわけです。で、そういった形で親と子がお互いにお互いを打ち負かそうとしてぶつかり合う関係、そういった関係を先ほど私は《否定＝対決型》親子関係という言葉で呼んでおきたいと言ったわけなんですけど、まさしくそういった関係を、先ほどの温泉の親子の「熱いよ！」「熱くないよ！」というやりとりに私は見てしまったんですね。そして、思ったんです。何という不幸な関係だろうって。

実際、親と子がこんな関係になってしまったら、親にとっても不幸だし、子どもにとっても不幸だと私は思うんですよね。第一、親の側から言いますとね、子どもがそんな調子でしたらね、子どものことをかわいいと思う気持ちなんか吹っ飛んでしまうと思うんです。だって、子どもは親の言うことなんかききもしないで、わがまま勝手のしほうだいというわけでしょ。自分の思い通りにならなかつたらすぐ泣くし、欲しいものが手に入るまでは泣きやまない。子どもがそんな調子でしたらね、子どものことをかわいいと思う気持ちなんか吹っ飛んでしまっただけ前。

子どもの側から言いましてもね、親がそんなふうでしたら、親に対して怒りを感じたり、憎しみを感じるようになったとしてもおかしくはない。だって、親は何でも自分の思い通りにしようとして、子どもの言い分には耳も貸さず、力づくで押さえつけようとばかりするわけでしょ。子どもがギャアギャア泣きわめいて、強情張って、わがまま言い通さない限り、欲しいものだって買ってくれない。親がそんな調子でしたらね、子どもの側としましても、親のことを好きになれるはずがない。

というわけで、親と子が《否定＝対決型》の関係になってしまったら、親が子どもをかわいいと思えば、子どもが親を好きになるという関係は絶対に

作れないということになる。それどころか、親と子がお互いにお互いを憎んだり、お互いに怒りやいらだちを感じたりするという結果にさえなりかねない。

ですから、私は、例の温泉で、お父さんと子どもが「熱いよ!」「熱くないよ!」と言い合っているのを見ながら思ったんです。「このお父さん、『そうか?』って言えばいいのに」って。子どもは「熱いよ」と言っているんだから、「そんなことはないよ!」「熱くはないよ!」なんて言わないで、「そうか、熱いか?」って言えばいいのにつて。お父さんがそう言ったら、子どもはきつと言うはずですよ。「そうだよ。熱いよ」って。そしたらお父さんは言えばいいんです。「そうか、熱いか。お父さんには熱くないけどね」って。で、お父さんがそう言ったら、今度は子どもが言うと思うんですよ。「そりゃあ、お父さんには熱くないかも知れないけど、でも、僕には熱いだよね」って。そしたらお父さんは言えばいいんです。「そうか、お前には熱いか」って。

要するに、相手の言い分を否定する必要はないんです。子どもは「熱いよ」と言っているんですから、それはそのまま認めてやればいいんです。もちろん、だからと言って、子どもに合わせる必要もないんです。自分では特に「熱い」とは思ってもいないのに、子どもが「熱い」と言うからといって、「そうだよ。熱いよね」なんて言うとしたら、それは「迎合」というものなんです。そんな迎合なんかする必要はないし、すべきでもない。そんな迎合なんか一切しないで、自分の考えは自分の考えとして、はっきり言えばいいんです。「そうか、お前には熱いか。お父さんには熱くないけどね」って。そうすれば、子どもも言うと思うんですよ。「そりゃあ、お父さんには熱くないかも知れないけど、でも、僕には熱いんだよね」って。

こういった応答のしかた、これはいったいどういう性質の応答のしかたなのかということについてちょっと考えてみていただきたいんですが、そういった応答のしかたというのは、まず第一に、相手の意見は相手の意見としてお互いに尊重しようとする応答のしかたであると言っていいと私は

思うんです。だって、子どもが「熱いよ！」と言ったとき、お父さんは「そうか、熱いか？」と言うことによって、子どもの意見は子どもの意見として尊重しようとする構えをとろうとされたわけですし、子どものほうもまた、同じように、「お父さんには熱くないけどね」とお父さんがおっしゃったとき、「そりゃあ、お父さんには熱くないかも知れないけどね」と言うことによって、お父さんの意見はお父さんの意見として少なくとも一応は尊重しようとする構えをとろうとしたわけですからね。ですから、先ほどのような応答のしかたというのは、まず第一に、相手の意見は相手の意見としてお互いに尊重しようとする応答のしかただと言って構わないと思うんです。

次に、そういった応答のしかたというのは、それと同時に、自分の意見は自分の意見としてお互いにはっきり言い合おうとする応答のしかたでもあるわけですね。だって、お父さんはお父さんで、「お父さんには熱くないけどね」と言うことによって、自分の意見は自分の意見としてはっきり言うという構えを示されたわけですし、子どものほうもまた、同じように、「でも、僕には熱いんだよね」と言うことによって、自分の意見は自分の意見としてはっきり言うという構えを示したわけですからね。

ですから、先ほどのような応答のしかたというのは、結局のところ、相手の意見は相手の意見としてお互いに尊重しつつ、自分の意見は自分の意見としてはっきり言うという応答のしかた、裏返して言いますと、自分の意見は自分の意見としてはっきり言うんだけど、だからといって自分の意見を相手に無理やり押しつけるのではなく、相手の意見は相手の意見としてお互いに尊重しようとする応答のしかた、ですね、そういった応答のしかただと言っていいと思うんです。で、そういった応答のしかたをお父さんがすれば、子どものほうも、同じように、そういった応答のしかたをするようになると思うんです。そして、そうなったとき、はじめて、親子の間には、相手の意見は相手の意見としてお互いに尊重しつつ、自分の意見は自分の意見としてはっきり言うという関係、つまり、自分の意見は

自分の意見としてはっきり言うんだけど、だからといって自分の意見を相手に無理やり押しつけるのではなく、相手の意見は相手の意見としてお互いに尊重しようとする関係、ですね、そういった関係が生まれてくると思うんです。そして、そうなったとき、はじめて、親子の間には、「対決」ではなく、「対話」の関係が生まれてくるし、そうした「対話」を通してお互いに理解し合い、お互いに共感し合おうとする関係も生まれてくると思うんです。

ですから、私は、そういった関係を、先ほど言った《否定＝対決型》親子関係というものと区別して、《共感＝対話型》親子関係という言葉で呼んでおきたいと思うんですが、そういった関係が生まれてきたとき、はじめて、親子の間には、お互いにお互いを信頼し、お互いにお互いを尊重しようとする関係が生まれてくると思うんです。そして、そういった関係が生まれてきたとき、はじめて、親が子どもを心からかわいいと思い、子どもは親のことを本当に好きになるという関係も生まれてくると思うんです。そして、また、そういった関係が生まれてきたとき、はじめて、親と子がともに生きて在ることを親子ともどもに喜べる関係も生まれてくると思うんです。ですから、私は、そういった意味で、《共感＝対話型》親子関係を作っていくことこそ、「いま」という時代のなかで子育てをしていこうとする場合、何より必要になってくることだし、何より大事になってくることだと思うんです。

そこで、次に、仮にそういった関係が生まれてきたとして、その結果どういうことになるのかということについてもひとこと言っておきたいと思うんですが、皮肉なことに、とでも言いましょうか、そういった関係が生まれてくれば、その結果、親子の間には意見の相違や対立がしばしば起こってくるということになってしまうんですね。あるいは、少なくとも、意見の相違や対立が表だって明らかになってくるということになってしまうんです。なぜなら、《共感＝対話型》親子関係というのは、先ほども言いましたように、相手の意見は相手の意見としてお互いに尊重しようとする関係

であると同時に、自分の意見は自分の意見としてお互いにはっきり言うという関係でもあるわけですから、その結果、親子の間に意見の相違や対立が起こって来たり、意見の相違や対立が表だって明らかになってきたとしても、むしろ当然のことなんですよね。

しかし、それでもまったく構わないと私は思うんです。よく、親子の間に意見の相違や対立があったらいけない、みたいな言い方がされることがありますけど、そんなことはないと思うんです。なぜなら、仮に対立があって困るのだったら、その対立を解決してしまえばいいという、それだけのことなんですからね。

たとえば、先ほどの温泉の親子の例で言いますと、子どものほうは「熱い」と言っていて、「だからお風呂には入れない」と言っているわけですね。ところが、お父さんのほうは「たいして熱くない」と思っているし、入ってもらわなければ困ると思っている。そうやって二人は真っ向うから「対立」しているわけなんですけれども、それくらいの対立を解決することなんて、簡単なことだと私は思うんですよね。

たとえば、子どもが「熱いよ！」と言ったとき、「そうか、熱いか」と言っておいて、「よし、わかった。それじゃ、お父さんにまかせろ」なんて言いながら子どもの身体にタオルを強ーく巻きつけてやって、「こーんなふうにしてね、タオルをぎゅうっと巻きつけておいて、お父さんがこうやってお前を抱き締めといてやるからね、そのままそーっと入ったら、ほーら、入れただろ」なんて調子で入ったら、子どもだって入れるじゃないですか。そしたら子どもも嬉しくなって、「ほんとだね、お父さん。お父さんの言うとおりでね」なんて調子で言いながら喜んだりして、その結果ますますお父さんのことを好きになったり、ますますお父さんのことを尊敬するようになってくれるかも知れない。そしたら、お父さんのほうも嬉しくなって、「当たり前だよ、そんなこと」なんて調子で言いながら、「だからお父さんの言うことを聞けって言っただろ！」なんて調子で自慢そうに言ったりして、で、そうやってお父さんと子どもはますます仲良しになっていって、

ますますお互いに信頼し合うようになっていくということだって、ありえないことではない。

あるいは、洗面器いっぱい冷たい水を汲んでおいて、「それじゃあ、この水をどっと入れるからね、その勢いで入るんだぞ。いいか、いちにのさん、せーの、はい！」なんて調子で言いながら洗面器いっぱいの水をお風呂にどっと流し込んでおいて、その勢いでバーツと入って、バシャバシャツといった調子ではしゃいだりして、まあ、まわりに迷惑にならない程度にはしゃいだりして、そのついでに親子のスキンシップでもやっちゃえばいい。そうやって「ほーら、ね、入れただろ」なんて調子で入ったら、子どもだってお父さんのことをますます好きになっていくだろうし、お父さんだってますます子どものことがかわいく思えるようになっていくでしょうから、お父さんと子どもはその結果ますます仲良しになっていって、ますます強い信頼と愛の絆で結ばれていく、なんてこともありえないことではない。

ですから、親子の間に対立があったって構わないんです。仮に対立があつて困るのだったら、その対立を解決してしまえばいいわけですし、そのことを通して親子がお互いにお互いを好きになり、お互いどうしますます信頼し、尊敬し合うようになっていくということだって、ありえないことではないんです。そういった意味では、対立が起こったときこそ、親子関係をますます豊かに作り上げていくチャンスでもあるはずなのに、たいていの場合はそうはしないで、「お前が間違いだ!」「いやいや、お父さんこそ間違いだ!」といった調子で言い合っていて、親子関係そのものを壊していってしまうんですね。

ですから私は言いたいんです。そんなことはもうやめましょうよ。そんなことはもうやめにしておいて、いったんは子どもの言い分に耳を傾けてみましょうよ。そうしたときはじめて豊かな親子関係を作っていく可能性は開かれてくるわけだし、子どもが豊かに育っていく環境も生まれてくるんだから、と。

で、そういった形で豊かな親子関係を作っていきたいと思うのだったら、何よりもまず、子どもに「わからせよう」とするのではなく、子どものことを「わかろう」としてみななければいけないと私は思っているわけなんです。ところが、これが、現実には、先ほども言いましたように、なかなか難しいことなんです。もう、たいていの人々が「親」という立場に立った途端に子どものことを「わかろう」とすることができなくなって、「そうじゃないでしょ、こうでしょうが!」「どうしてそんなことがわからないのよ!」「ちゃんと言うことをききなさい!」といった調子で言ってしまって、結局は《否定=対決型》の関係を作っていくって、親子関係そのものを壊していってしまうんですね。

以下、そうした例をいくつか具体的に挙げながら、もう少し話を続けていきたいとします。

*

数年前のことですが、子どもが登校拒否みたいな状態になって困っているという、あるお母さんの話を聞く機会があったんです。中学一年の男の子なんです。その子はほんの些細なことで友達と口喧嘩みたいなことになってしまって、それで何となく学校に行きづらくなって、二三日学校を休んでしまったというんですね。だけど、二三日もしたら気分も落ち着いてきて、学校に行こうかなという気になって、実際に学校に行ってみたわけなんです。行ってみたらどうも様子がおかしいというんですね。

実は、その子が学校を休んでいた二三日の間に、学校では対策会議が開かれていましてね。「すわ、登校拒否だ!」というわけで、職員会議なんかが開かれたりして、「学校としてもきちんとした受け入れ態勢を作らなきゃ!」みたいなことになっていって、クラスでも「○○君が学校にきたらみんなで暖かく迎えようね」というような話し合いが行われていって……、というような状態になっている、そのなかに、そんな状態になっているとも知らないで、その子は二三日ぶりに学校に行ってみて、もう、

びっくりしたというわけですね。その子としては、二三日学校を休んでしまった後、何となく気まずい思いをひきずりながら学校に行ったわけなんです。そんな気持ちはおくびにも出さず、何くわぬ顔で学校に行くと、みんなのなかにそおっと紛れ込もうと思いつきながら教室に入ってみたら、その途端に、「よくきたねえ！」って調子でみんなから迎えられて、クラス中の視線を一身に浴びてしまったというわけですよ。ですから、もう、びっくりして、飛んで帰ってきたというわけですね。で、それをきっかけにその子はますます学校に行きづらくなって、登校拒否みたいな状態になってしまったというわけですね。

こういうふうに言いますと、もしかしたら「先生たちのやり方がおかしい！」とか「学校の対応がひどすぎる！」と私が言いたがっているように聞こえるかも知れませんが、念のために言っておきたいんですが、私は先生たちを非難しようと思ってこの話をしてるわけではないんです。実は、先生たちがそういう対応をなさったのもある意味ではしかたがなかったと言いましょか、無理ない状況があったんですね。と言いますのも、実は、その子のお兄ちゃんが、長い間、登校拒否の状態にあったんです。中学校に上がって間もないころからほとんど学校に行かなくなって、それからおよそ二年と数ヶ月の間、登校拒否の状態がずうっと続いているという、そういう状況があって、そうした状況のなかで今度は弟のほうが学校にこなくなったというわけですよ。ですから、「今度は弟までもが登校拒否か?！」というような受けとめ方が先生たちの間ではなされていって、で、「今度はきちんとした対応をしなければいけないぞ！」みたいな思いを先生たちはもたれていって、それでそういう対応になっていったというわけですね。ですから、先生たちとしては精一杯、誠実に対応しようとなさったわけですから、先生たちを非難してもしかたがないと私は思うんです。

だいたい、教育について語るとき、学校や先生を「悪者」に仕立て上げて語るという語り口がありますよね。こんなにひどい教師がいてこうなったんだとか、学校の態勢がこんなにひどいからこうなったんだ、というよ

うな形の語り口。そういった議論にはそれはそれで聞くべき点がないわけではないだろうとは思いますが、しかし、そういった議論ばかりしていたのではいけないんじゃないか、とも私は思うんですよね。もちろん、なかには本当にひどい教師もいて、体罰教師もいれば、セクハラ教師も確かにいる。それが間違いなく学校のひとつの現実なんだと言われれば、もちろんその通りだろうとは思いますが、しかし、それでもなお、大多数の先生はそれなりに誠実で、教育熱心な人たちだということもまた、間違いなくもうひとつの現実だと私は思うんです。

実際、ほとんどの先生は、なぜ先生になったかという、子どもが好きだから先生になったんだという、そういう人が圧倒的に多いと思うんです。で、そういう人が先生になって、それなりに一生懸命やって、一生懸命やっているにもかかわらずいい結果が出ないというか、一生懸命やればやるほどよくない結果が出てしまうというか、そういう状況があると思うんです。としますと、学校や先生を非難しておしまいというような議論ばかりしてはいけないんじゃないか。本当に意味ある議論をしたいのだったら、そんな議論ではなく、誰も「悪者」にしない議論とでも言いましょうか、ほとんどの人は善意に満ちた誠実な人で、その人たちが一生懸命やっているにもかかわらず問題は起こっているんだという、そういう現実には照準を当てるような議論をしなければいけないんじゃないか。そう私は思うんです。ですから、いま私が言おうとしていることを学校や先生に対する非難としては絶対に聞かないように、くれぐれもお願いしておきたいんです。

というわけで、いささか余計なことを言ってしまいましたけれども、それはともかくとして、そういうわけで、その子は何くわぬ顔で学校に行って、みんなのなかにそおっと紛れ込もうと思いつきながら教室に入っていったわけなんです。その途端に「よくきたねえ！」って調子でみんなから迎えられて、クラス中の視線をいっぺんに浴びてしまって、それでもうびっくりして、飛んで帰ってきて、そのまま学校に行かなくなって、軽い登校

拒否の状態とでも言いましょうか、そういう状態になってしまったというわけなんですけど、登校拒否といってもせいぜいそれぐらいのことで始まったものですから、大して深刻なものではないわけですね。ですから、しばらく休んでいたら、そのうちにまた、学校に行こうかなあという気になってくるわけです。しかし、学校に行こうかなあという気にはなるんだけど教室に入るのは何となくバツが悪いということで、教室には入らないで保健室に行くという、いわゆる「保健室登校」をしているという状態。そういう状態でその子は学校に行っていたわけなんですけど、その子が学校から帰ってきてこう言うんですよって、その子のお母さんが言われるんですね。「僕が保健室のベッドで休んでいるとね、休み時間のたんびにクラスの女の子が二人でやってきて、窓を叩くんだよね」って。

その子は、多分、廊下に面した側のベッドで休んでいたんだろうと思うんです。そしたら、休み時間のたんびに同じクラスの女の子が二人ほどやってきて、こんこんと窓を叩いて合図するというんですね。で、その子としてはそれがいやでいやでたまらないらしくて、家に帰ってきて、母親に、「どうしてあんなことをするのかね!」「あんなことをされたらたまらないよね!」「もう、あんなことはやめてほしいんだよね!」といった調子で憤慨しているというわけですね。それで、私は、そのお母さんに聞いてみたんです。「子どもさんがそうおっしゃったとき、お母さんとしてはどう答えられたんですか」って。そしたら、そのお母さんがおっしゃるんですよ。「でもね、あなたはそう言うけどね、〇〇さんたちとしてはあなたが久しぶりに学校にきたから嬉しくなって、『よくきてくれたね』『これからもずっときてね』って言い、わざわざきてくれたんじゃないの? それなのに、そんなふうに言ったんじゃ、〇〇さんたちがかわいそうよって言ったんですよ」って、そのお母さんはそうおっしゃるんですね。

さて、皆さん。皆さんはいまの話聞いていて、どう思われたでしょうか。このお母さんがおっしゃったことについて、皆さんはどう思われたでしょうか。

この間、私のところによく顔を出してくれる何人かの学生さんたちにこの話をして、同じことを聞いてみたんですよね。そしたら、その学生さんたち全員が、一斉に、口を揃えて言うんですよね。このお母さんのおっしゃる通りだって。そういうふういきちんと言えるこのお母さんは実に立派だと思っって、皆が皆、そう言うんですよね。皆さんとしてはどう思われたでしょうか。

もちろん、私自身としましても、このお母さんがおっしゃっていることそれ自体は少しも間違っていないと思っんです。というより、むしろ、立派すぎるぐらいに立派だとさえ思っんです。しかし、子どもとの関係の作り方という点で言えば、このお母さんのやり方は完全に間違っっていると私は思っんです。だって、このお母さんがいままさに作ろうとなさっている関係こそ、先ほど言った《否定＝対決型》親子関係そのものなんですからね。

だって、そうだとはいませんか。学校から帰ってきた子どもが言ったんですよ。「僕はいやなんだよね、お母さん。あんなふうにされたら」って。そしたらお母さんはおっしゃったんですね。「でもね……」って。「そんなふうに言うもんじゃないよ」って。ということはどういうことかと言いますと、このお母さんは最初っから「否定の構え」をとってしまわれたというわけなんですよね。としますと、このお母さんと子どもとの関係がその後どのように展開していくか、説明しなくてもわかりますよね。

子どもがお母さんに言ったんです。「俺はいやだなんだよね、お母さん。あんなふうにされたら」って。そしたら、お母さんはおっしゃったんですね。「でもね……」って。「そんなふうに言うもんじゃないよ」って。「〇〇さんたちとしてはこれこれこういう気持ちできてくれたんだらうから、そのところをわかってあげなきゃ、〇〇さんたちがかわいそうよ」って。そしたら子どもは言いたくなくなってしまうじゃないですか。「そりゃあそうかも知れないけど、でも、俺としてはいやなんだよね！」って。そしたらお母さんはおっしゃるでしょうね。「あなたそう言うけどね、〇〇さんたちとし

ては、あなたのことを思ってきてくれたわけでしょ。それなのに、あなたは自分のことばかり言って、それじゃあ、〇〇さんたちがかわいそうよ」って。そしたら、もう、そのあたりで子どもは頭にきてしまって、「すぐお母さんはそう言うんだから！ もういいよ！ お母さんとなんかもう話したくもないよ！」って感じで吐き捨てるように言って、ドシンドシンドシと階段を踏みならしながら二階に上がって行って、ドアをバターンと閉めて……、という、そういう展開になってしまいますよね。

本当に、いったいなぜそういう展開にしてしまわなければいけないんでしょうか。せっかく子どもが話しかけてきたんですよ。「あのね、お母さん」って。それなのに、お母さんはいきなり「否定の構え」をとってしまって、「でもね、あなたはそう言うけどね……」って調子で言ってしまって、結局は《否定=対決型》の関係を作って行って、子どもとの関係をめちゃめちゃに壊して行ってしまうんですよ。本当に、いったいなぜそんな馬鹿なことをしなければいけないんでしょうか。

聞いてやればいいんですよ。「そうなのか？」って。「それがそんなにいやなのか？」って。あるいは、わざわざ聞かなくても子どもの気持ちはよくわかるというのだったら、言ってやればいいんですよ。「そうだろうねえ。それはいやだろうねえ」って。そしたら子どもは言うはずですよ。「わかるか？ 俺の気持ち、わかってくれるか？」って。そしたら言えればいいんです。「わかるよ。わかるとも！」って。そうすれば、親と子がお互いにわかり合い、お互いに共感し合う関係がいとも簡単にできてしまうんです。

あるいは、子どもの気持ちがよくわからないというのだったら、子どもに聞けばいいんです。「どうしてそれがいやなのか？」って。そうすれば、子どもが教えてくれるはずなんです。「だってね、お母さん、考えてもみてよ。俺はね、友だちと顔を合わせるのがいやだったんだよ。だから教室には行かないで、保健室に行ってたんだよ。それなのに、〇〇さんたちときたら、その保健室までわざわざやってくるんだよ。そしたらさ、俺としてはいやじゃないか！」って。

そういうふうに教えてもらったら、親としても子どもの気持ちが理解できてくるでしょうから、そしたら言えればいいんです。「なるほど。それだったらいやだろうね」って。で、親のほうがそう言ったら、子どもも言うと思うんですよ。「そうだろ、お母さん。わかるだろ。俺がいやだと思いう気持ち、わかるだろ」って。そしたら言ってやればいいんです。「わかるよ。わかるとも」って。そうすれば、親子がお互いにわかり合い、お互いに共感し合う関係がいつも簡単にできてしまうんです。それなのに、現実にはたいていの親がそうはしないで、「でもね……」とか「そうは言うけどね……」って調子で言ってしまって、結局は《否定＝対決型》の関係を作っていて、子どもとの関係をめっちゃめっちゃに壊していつてしまうんです。本当に、いったいなぜそんな馬鹿なことをしなければいけないんでしょうか。

もちろん、先ほども言いましたように、このお母さんがおっしゃっていることそれ自体は、私自身としましても、少しも間違っていないとは思っています。というより、むしろ、正しすぎるぐらいに正しいとさえ思っています。しかし、正しければいいというわけではないんです。

一般的に言いましても、「わからせよう」としているときの親の言い分というものは、たいていの場合、正しすぎるぐらいに正しいと言っていいと思うんです。しかし、たとえ親の言い分が正しかったとしても、子どもとの関係の作り方という点で言えば、親は完全な間違いを犯してしまっているんです。というより、むしろ、親の言い分が正しければ正しいほど、関係の作り方という点で言えば、親はますますひどい間違いを犯してしまっているはずなんです。だって、自分の言い分が正しければ正しいほど、親としては、ますます子どもが間違っているとしか思えなくなってしまいますし、「いったいなぜこんなことがわからないんだ！」と言いたくなる気持ちもそれだけますます強くなってしまいますから、その分だけ余計、子どもに言って聞かせたくなってしまいうんですね。そうしますと、子どもとの関係はますます《否定＝対決型》の関係になっていつてしまいますから、親子関係のあり方もそれだけますます壊れていつてしまいうんですね。

ですから、親が言っていることそれ自体が正しければいいというわけではないんです。親の言い分が正しかろうと正しくなかりょうと関係なく、というより、むしろ、親の言い分が正しければ正しいほど、子どもに「わからせよう」とする形で関係を作っていけば、子どもとの関係はますます《否定=対決型》の関係になっていってしまうんです。だからこそ、子どもとの関係を豊かに作っていきたいと思うのだったら、子どもに「わからせよう」とするのではなく、子どものことを「わかろう」としなければいけないんです。そうしたとき、はじめて、親子がお互いに分かり合い、お互いに共感し合おうとする関係は生まれてくるんです。

ですから、ともかく子どもに「わからせよう」なんてしないことなんです。あくまでも子どもの言い分を「わかろう」とするところから始めることなんです。で、まずはそうやってお互いに分かり合い、お互いに共感し合う関係をお互いの間に作って行って、そういう関係ができた後で言えばいいと思うんです。あるいは、そういう関係のなかで言えばいいと思うんです。「でもね……」ってことは。そうすれば、親が言いたいと思うことぐらい、子どもにはスッと通じていくはずなんです。

だいたいね、親が子どもに「わからせたい」と思っていることぐらい、わざわざ「わからせよう」なんてしなくても、子ども自身、自分でわかっているはずなんですよね。先ほどから話題にしてきた「保健室登校」の子どもにしたって、絶対にそうだったはずなんです。その子の場合、休み時間のたんに保健室をのぞきにくる女の子たちへの怒りをぶちまけていたわけなんですけど、だからと言って、その子自身、その女の子たちは自分にいやがらせしようと思って保健室をのぞきにきているんだなんてふうに思っていたわけではないんですね。むしろ、その子のお母さんがおっしゃっていましたように、しばらく学校にこなかったその子が久しぶりに学校にきたことをその女の子たちは喜んでくれて、それでわざわざ「よくきたね」「これからもきてね」って言いに来てくれたんだということは、その子自身、わざわざ親から教えられるまでもなく、自分でもわかってはいたんですよね。

としますと、「〇〇さんたちとしてはこれこれこういう気持ちできてくれたんじゃないか」なんてことをその子に「わからせよう」とする必要なんか、まったくなかったわけなんですよね。「わからせよう」なんてことは一切しないで、その子が言おうとしていることにひたすら耳を傾けていって、「なるほどね。それだったらいやだろうね」って感じで聞いていけばよかったんですよね。そうしたとき、はじめて、その子としては、言いたいことは十分に言えたという気持ちになれたはずですし、聞いてほしいことは充分聞いてもらえたという気持ちにもなれたはずなんですよね。そして、そういう気持ちになれたとき、はじめて、その子としては、相手の言い分に耳を傾けてみようかなという気持ちにもなれたはずなんですよね。

ですから、そうなった時点でこそ言えばよかったんだと私は思うんです。「でもね……」ってことは。「〇〇さんたちとしてはこれこれこういう気持ちできてくれたんだらうから、そここのところはわかってあげなきゃ、〇〇さんたちがかわいそうよ」って。そうすれば、そんなことぐらい、わざわざ言われるまでもなく、子ども自身が自分でわかっていることなんですから、「それはそうなんだけどね」とか、「それは自分でもわかっているんだよね」って感じで言ってくれるはずなんですよね。

*

以上、「わからせる」より「わかる」こと、ということについて話して参りました。同じような例をもうひとつだけ紹介してみたいと思います。

今度は登校拒否の子どもではなく、少し前に大学を卒業なさった娘さんのケースなんですけど、その娘さんは子どものころから対人関係を作るのが非常に苦手と言いましょうか、そういうタイプの人だったんですね。第一、相手にいやな思いをさせたらその人に悪いと思って気を使ってしまいますし、自分がその人からいやな奴だと思われるのもいやだということで、ほかの人と一緒にいると非常に緊張して、くたくたに疲れてしまうんですね。ですから、その娘さんとしては、むしろ、ひとりであるほうが気楽ではあ

るんですが、しかし、ひとりでいるのは孤独ですし、孤独ほどつらいことはありませんから、ひとりぼっちではいたくないという思いもあるわけですね。というわけで、その娘さんは、結局、ひとりが気楽と一方では思いつつ、しかし、ひとりでいる孤独と淋しさには耐えられず、だからこそ友だちと一緒にいたいと思うんだけど、にもかかわらず、友だちと一緒にいるのも苦痛だという、そういうディレンマを抱えた人だったわけですね。

ですから、その娘さんにとって「生きていく」ということはそれ自体が本当に大変なことだったんだと思うんですが、それでも必死に頑張っていて、小学校から中学校、中学校から高校へと、どうにかこうにか乗り切っていて、ようやく大学卒業というところまでこぎつけてきたわけなんですけれども、その時点で力つきてしましまして、大学は卒業したものの就職しようという気にはなれず、郷里を遠く離れた都会のアパートの一室に閉じこもったまま、ほとんど動けない状態になっているという状況。それで、いったいどうしたものかということで、ご両親は非常に悩んでいらっしやったわけなんですけど、そのまま放っとくのはかわいそうすぎますし、あまりにも残酷だということで、もう親元に連れて帰りましょうよ、もう呼び戻しましょうよ、ということになっていって、結局親元に呼び戻すことになったわけなんですけど、もともとそういうタイプの娘さんですから、親元に帰ってはきたものの、ほとんど家に閉じこもったまま、人中に出ていこうという気にはなかなかない状態が続いているという状況。

それで、その娘さんのご両親は大変悩んでいらっしやいまして、私たちもいろんな相談を受けたり、一緒に悩んだりしてきたんですけれども、その過程で、ご両親は、少しずつ少しずつ変わっていかれるんですね。そうしますと、それにつれて、娘さんのほうも、だんだんだんだん変わっていかれるんです。

一般的に言われていることなんですけど、親が子どもを変えようとしてもなかなか子どもは変わらないんですが、親自身が変わっていけば、子どものほうも、自然に変わっていってしまうんですね。どうしてかと言います

と、親のほうが変わっていけば、その結果、親子関係のあり方が変わってしまうということになりますから、子どものほうも、変わらざるをえなくなってしまうんですね。ですから、子どもを変えたいと思うのだったら子どもを変えようなんてするのではなく、親自身が変わってしまえばいいんです。あるいは、親自身が変わろうとしなければいけないんです。これは、もう、親子関係を考えるときの「鉄則」と言って差し支えないと私は思っているわけなんです。まさしくその「鉄則」どおり、この娘さんの場合も、ご両親が変わっていかれるなかでだんだん変わって行って、少しずつ少しずつ元気になっていくんですね。で、そうやって少し元気が出てきますと、この娘さんのような人の場合は、たいていの場合、人中出现ていきたいという気持ちが出てきます。それで、その娘さんは、「アルバイトがしたい」というようなことを言い始めるんですね。

しかし、アルバイトがしたいとはいうものの、もともとそういうタイプの娘さんですから、普通の子と同じようにアルバイトするパワーはないわけですね。ですから、なかなかいいアルバイト口が見つからなくて困っていたわけなんです。幸いなことに、以前からの知り合いで、小さな会社を営んでいる社長さんが近所にいらっしゃいまして、その人が、「よかったらうちで手伝ってみないか」って声をかけて下さったというんですね。それで、「どうする？」って娘さんに聞いてみたところ、娘さんも「是非やってみたい」ということで、「それではよろしく」ということになって行って、結局その娘さんはその社長さんのところでアルバイトを始めることになったわけなんです。そのことをご両親は大変喜んでいらっしゃいましてね、特にお母さんが喜んでいらっしゃいまして、「最近娘がアルバイトを始めたんですよ」って感じで、本当に嬉しそうにおっしゃるんですね。

それも、まあ、当然のことですよ。だって、それまで家に閉じこもってばかりで、ほとんど外に出ていこうとしなかった娘さんが、アルバイトを始めただけですからね。親としてみれば、こんなに嬉しいことはありませんよね。ですから、ご両親がそのことを心から喜んでいらっしゃったの

はもちろん当然のことだとは思いますが、しかし、そのような場合、あまりにも単純に喜んでしまって、手放して安心してしまってはいけないとも私は思うんですよね。だって、その娘さんがこれからもずっとそのアルバイトを続けていけるのかどうか、何の保証もないわけですし、いつかまたしんどくなって、挫折してしまうということだって、ありえないわけではないわけですからね。ですから私たちは言ったんですよね。「でもね、お母さん」って。「いままで家に閉じこもってばかりだった娘さんがアルバイトを始めたわけだから、親として嬉しいと思うのは当たり前なんだけど、でも、そのアルバイトがそのままずっと続いていくなんて考えないで、いつまで続くかわからないぐらいに考えておいたほうが良いと思いますよ。だって、いつかまたしんどくなって、挫折してしまうときがこないとも限らないわけですからね。そんなとき、親ががっかりしてしまったら、娘さんを二重に苦しめてしまうことになってしまいますからね」って。

実際、子どもが挫折してしまったとき、まわりの者ががっかりしてしまったら、本人を二重に苦しめてしまうことになると思います。だって、挫折した本人とすれば、挫折したことで苦しんでいる、そのときに、まわりからは責められてしまうわけですからね。ですから、いったん挫折していた子どもが立ち上がったとき、そのことをまわりの者が喜ぶのはもちろん当然のことだとは思いますが、しかし、それと同時に、まわりの者は、いつかまた挫折するときがくるだろうけど、それでもしかたがない、ぐらいの感覚でいなければいけないんですよね。

で、挫折したらしばらく休んで、しばらく休んだらまた立ち上がる。しかし、いつかまたしんどくなるときがくるだろうから、そのときはまたしばらく休んで、しばらく休んだらまた立ち上がるという、そういうことの繰り返しの中かでしか本当の力はないわけですから、まわりにいる者としてはその度に一喜一憂するなんてことはしないで、どっしり構えてその子を見守っていく、みたいな感覚でいるようにしなければいけないんですよね。まあ、現実には、なかなか難しいことなんですけどね。

ですから、そういった意味を込めて私たちは言ったんですよ。「仮に、いつかまた娘さんが挫折するようなことがあったとしても、そのときがっかりしてはいけませんよね」って。そしたらそのお母さんも「そんなことぐらい、私だってわかっていますよ」とおっしゃって……，というような会話が実はあったわけなんですけど、案の定、たとえば少々言葉がひどすぎるような気もしますが、アルバイトを始めてから2～3カ月が過ぎたころ、「あのアルバイトはもうやめたい」と娘さんが言いだしましてね。で、「お母さん、あのアルバイト、しんどいからもうやめたいって娘が言うんですよね」って、そのお母さんがおっしゃるんですね。

それで、私たち、そのお母さんにきいてみたんです。「娘さんがそうおっしゃったとき、お母さんとしてはどう答えられたんですか」って。そしたら、そのお母さんがおっしゃるんですね。「以前の私なら言っていたと思うんですけど」って。「しんどくなったからといって、すぐやめたいだなんて、わがまますぎるんじゃないの？」って。「社長さんは親切でアルバイトをやらせて下さったのよ。それなのに、少しぐらいしんどくなったからといって、すぐやめたいだなんて、社長さんに対して申し訳ないとは思わない？ それに、あなたがパッと辞めてしまったら社長さんだって困ってしまわれるかも知れないから、せめて代替わりの人が見つかるまでは我慢しなければいけないんじゃないのって、そんなふうに言っていたと思うんですよ」って。

皆さん。もう、おわかりですよ。このお母さんがおっしゃったような対応のしかたが何なのか、説明しなくてもわかりますよね。これは、もう、「対決」の構えそのものなんですよ。

仮にお母さんがそういう対応をなさっていたとすれば、娘さんとしては、当然、「すぐお母さんはそう言うんだから！」とか、「私がどんなにしんどいか、お母さんにはわからないのよ！」なんて調子で言いたくなってしまうでしょうし、そしたら、お母さんも、売り言葉に買い言葉で、「少しぐらいしんどくなったからといって、すぐやめたいだなんて、わがままがすぎ

るんじゃないの!」とか「甘ったれるのもほどほどに下さい!」といった調子で言いたくなくなってしまおうでしょうから、二人の関係は結局《否定=対決型》の関係になっていって、親子関係はめっちゃめっちゃに壊れていくということになってしまいますよね。

ですからそのお母さんはおっしゃったんですね。「以前の私ならそう言っていたと思うんですけど」って。「でも、今回はそうは言わなかったんですよ」って。「おかげで私も少しは変わることができましたし、いまはもう以前の私ではありませんから、しんどいからアルバイトをやめたいと娘が言ってきたとき、『そうなの? そんなにしんどいの?』って言うことができたんですね。そしたら、娘が言うんですね。『そりゃあね、お母さん、それはしんどいよ』って。それで、『何がそんなにしんどいのかね?』って聞きましたら、『そりゃあね、お母さん、何がしんどいかってね、いまどきの事務とったら、あんな小さな会社でも、コンピューターを使うんだよね』って。で、自分は全然コンピューターのことがわからないって娘は言うんですね。ですから、誰か事務所にいるときはその人にやり方を教えてもらいながら仕事をするんだけど、あんな小さな会社のことだから、誰も事務所にいないときが結構ある。そんなときは何にも仕事ができないのよって。で、何にも仕事しないで給料をもらうつらさって、お母さん、わかるかって、娘がそう言うんですね」って。

そんなふうに言われましたらね、その娘さんがどんなにしんどい思いでアルバイトをしてきたか、誰だってわかりますからね、だからそのお母さんはおっしゃったんですね。「それはつらかったらうねえ」「しんどかったらうねえ」って。そしたら、その娘さんも、「そうよ、お母さん。それはつらかったよ」って言って、「だからね、あんな小さな会社でアルバイトをするのでもコンピューターが使えなきゃいけないっていうんだから、コンピューターの勉強ぐらいしとかなきゃいけないのかなって思っているんだけどね」って、そう娘さんは言っているというんですね。

皆さん、もうおわかりですよ。

この娘さんは、家に閉じこもっていた状態から一歩抜け出してアルバイトを始めてはみたんだけど、コンピューターも使えないでアルバイトをするしんどさが耐えきれなくなって、もうダメだ、これ以上はもう続けられない、というところまで追いつめられてしまって、結局挫折してしまったわけなんですけれども、それと同時に、いまのままの自分ではいけないんじゃないか、コンピューターの勉強ぐらいしとかなければいけないんじゃないか、というような気持ちにもなり始めていた、その矢先に、「しんどくなったからといって、すぐやめたいだなんて、わがママがすぎるんじゃないの?」とか、「もうちょっとぐらい我慢しなきゃ、社長さんに対して申し訳ないんじゃないの?」なんて調子で言われたら、娘さんとしては、当然、「何よ、お母さん!」とか、「私がどんなにしんどいか、お母さんにはわからないのよ!」なんて調子で言いたくなってしまおうでしょうし、「お母さんとなんかもう話したくもない!」と言いたくもなってしまうでしょうから、娘さんとしては、結局、お母さんとの関係そのものをぶち壊してしまいたくなるような気持ちにさえさせられてしまいますよね。

ですから、「もうやめたい」と娘さんが言ってきたとき、「でもね……」とか「あなたはそう言うけどね……」なんてことを言わないで、娘さんが語りかけてくる言葉そのものにまずは耳を傾けていって、「そうなの? そんなにしんどいの?」って感じで聞いていかなければいけないと私は思うんです。あるいは、「何がそんなにしんどいの?」って感じで聞いていかなければいけないと思うんです。そうすれば、娘さんだって、きっと、「そりゃあね、お母さん、何がしんどいかといたらね……」って感じで教えてくれるはずなんです。で、そうなったときはじめて、親子の間には、お互いに共感し、お互いに対話しようとする関係が作られていくわけですし、そういった関係のなかで、はじめて、子どもも素直に心を開いていってくれると思うんです。それなのに、現実には、たいていの人々がそうはしないで、いきなり「対決の構え」をとってしまって、「でもね……」とか「あなたはそう言うけどね……」って調子で言うってしまうんです。そして、

「せっかく社長さんが親切にして下さったんだから、少しぐらい我慢しなきゃいけないんじゃないの?」とか、「それじゃあ、社長さんに対して申し訳ないんじゃないの?」なんて調子で言ってしまって、結局は社長さんに対する義理立てとでも言いましょうか、そういったことばかり考えてしまって、肝心要の子どもに対しては「対決の構え」で臨んでいってしまうんですね。

ですから、そんなことはもうやめにして、いまは子どもと対話しているわけなんですから、子どもと対話するというそのことに全神経を集中していかなければいけないと私は思うんです。そのためには、社長さんに対する義理立てなんてものは少なくともいったんは棚上げして、子どもが語る言葉そのものに耳を傾けていくことを最優先にするというふうにしなればいけないと思うんです。

ただし、万が一誤解されるようなことがあったらいけませんから、念のために言っておきたいんですが、こう言ったからといって、私は、社長さんから受けた恩義なんてどうでもいいとか、社長さんに対する義理立てなんて必要ないとか、そんなことを言いたいわけではないんです。社長さんから受けた恩義はあくまでも社長さんから受けた恩義なんですから、その恩義に対してはやはり、感謝しなければいけないと思うんです。しかし、だからと言って、社長さんに対して義理立てするということを最優先にしてしまったら絶対にいけないとも思うんです。だって、万が一そうしてしまったら、子どもの言葉そのものに耳を傾けていくという肝心要のことが二の次になってしまいますし、結局は《否定=対決型》の関係を子どもとの間に作っていったら、親子関係そのものをめっちゃめっちゃに壊していくということになってしまいますからね。

ですから、社長さんから受けた恩義はあくまでも社長さんから受けた恩義なんですから、それにはもちろん感謝するとして、しかし、いまは子どもと対話しているわけなんですから、子どもと対話するというそのことに全神経を集中しなければいけないと思うんです。で、まずはそうやってお

互いに分かり合い、お互いに共感し合う関係を子どもとの間に作って行って、そういった関係ができた後で言えばいいと思うんです。あるいは、そういった関係のなかで言えばいいと思うんです。「でもね……」ってことは。そうすれば、親が言いたいと思っていることぐらい、子どもにはパッと通じていくはずなんです。

だいたいね、親が言いたいと思っていることぐらい、わざわざ親になんか言われなくても、子ども自身、自分でわかっているはずなんです。この娘さんの場合だって、絶対にそうだったはずなんです。本当はね、この娘さんはずっと前からしんどくなっていて、やめたくてやめたくてしかたがなかったはずなんです。だけど、「よかったらうちで働いてみないか」と親切に言って下さった社長さんのことを思えば簡単にやめたいとも言えないで、だからこそ一生懸命我慢して、必死の思いでそのアルバイトを続けてきていたはずなんです。本当はやめたくてやめたくてしかたがないんだけど、義理があるからやめられない。つらくてつらくてしかたがないんだけど、それでもやめたいとは言い出せない。そんな思いで一生懸命頑張ってきて、それでももう我慢できなくなって、もうダメだ、これ以上はもう続けられないというところまで煮詰まってしまったときに「もうやめたい」とお母さんに言ってみたら、その途端に、「少しぐらいしんどくなったからといって、すぐやめたいだなんて、わがママがすぎるんじゃないの？」とか、「それじゃあ、社長さんに対して失礼なんじゃないの？」なんて言葉が返ってきたとしたら、娘さんとしては、もう、絶望するしかなくなってしまいますよね。

ですから、社長さんから受けた恩義はあくまでも社長さんから受けた恩義なんですから、それにはもちろん感謝するとして、しかし、いまは子どもと対話しているわけなんですから、あくまでも子どもと対話するというそのことに集中して行って、お互いにわかり合い、お互いに共感し合う関係をまずは子どもとの間に作って行って、そういった関係ができた後で言えばいいと思うんです。あるいは、そういった関係のなかで言えばいいと

思うんです。「でもね……」ってことは。「あなたがパッとやめてしまったら社長さんだって困ってしまわれるかも知れないから、せめて次の人が見つかるまでは頑張ってみるべきだとは思わない？」って感じで。そうすれば、そんなことぐらい、娘さん自身、百も承知のことなんですから、「それは自分でもわかってるんだよね」とか、「自分でもそのつもりではいるんだけどね」って感じで言ってくれるはずなんです。

(以下次号)